

出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第9回 病弱教育との出会い

がんセンターのなかにある学校

知的障害校に勤務して24年、次の異動先は肢体不自由校に決まりました。ところが、面接に行くと「病弱部門で中高生の数学を指導してほしい」と言われました。場所は国立がんセンター小児病棟にある「いるか分教室（以下、いるか）」。小学生から高校生までが小児がんの治療をしながら学ぶ場だといいます。

思ってもみなかった異動先。そして、病弱教育は私にとってもまったく知らない世界。とにかく行ってみて自分のできることを見つけようと新年度を待ちました。

春休み、子どもたちに会う前に一人ひとりの病状の引継ぎがありました。「一旦治療は終えたが肺に転移が見つかった」「初発のとき片足を切断。再発してもう片方も切断した」「顔に大きな腫瘍があり手術を控えている」…きびしい話が続き

ました。きびしい状況なら、なおさら楽しい生活を生み出したい。目の前の子どもと少しでも早くわかり合いたい。そう思い病室を回りました。

男子高校生のベッドサイドにトランプを見つけ、「マジック好きなの？ 実は俺：マジシャンもやってるんだよ」。名前はボブチャンチン！とプロがテレビで演じるマジックを見せて意気投合。一番弟子になった彼は学期末の発表会で病棟スタッフや保護者の前であざやかなカードマジックを披露し拍手喝采を浴びました。

予備校のテキストを進めたいけど解答がなくて困っていた子には、その日のうちに単元すべての解答を作り翌日手渡しました。「できることはその日のうちに」「先延ばしにしない」。病院に行つて感じたことです。いつなが起こるかわからない場。なにより本来の居場所を離れ不安を抱えている子たちに少しでも早く応じたかったのです。

それからの病弱教育でのかけがえのないたくさんのお出会。あつとき、いるかに行けてよかった。心から思います。

患者であることが忘れられる場

がんセンターの小児病棟。ナースステーションを中心に周囲をぐるりと病室やプレイルームが並びます。その一角にいるかの教室があります。車いすでも点滴をつけたままでも一人で来ることができ、点滴のアラームが鳴っても看護師さんが来てくれ病室に戻る必要ありません。「行きたいときに行ける」のは治療中の子どもたちにとってなよりの環境です。教室は一つだけ。30畳ほどのスペースに子どもが4〜5人集まれるテーブルが4台。ここで、小学生から高校生までが学んでいます。

高校1年の秋からいるかで過ごしたみおさんは前籍校に戻り「病院内にある学校／病弱教育の実態」と題したレポートを書きあげました。そのなかで、いるかのことを次のように紹介しています。

「いるかの一日は朝9時頃から始まる。『おはようございまーす』という元気を挨拶と共に小、中、高校生が一斉に登校してくる。当然のことながら点滴をつけている子どもも少なくはない。…小学校低学年から高校生まで、同じ教室で勉強している『いるか』。部屋の一方で国語の音読をしていれば数式を解いている子どももいる。そのうちに小学部の元気を歌声も聞こえてきたりする。決して学ぶ環境として恵まれてはいないが、そこがまた『いるか』のいいところなのだ。病院の中と

は思えないほど賑やかで明るい教室は自分が患者であることを忘れ、自然に笑みがこぼれる」

そう。いるかにはいつも笑顔と笑い声があふれているんです。個々に授業をしていますが、今日は小学生の〇〇ちゃんの誕生日ってわかった途端、中高生も授業なんてやっている場合じゃありません。ギターが得意な先生が伴奏を始め、全員でハッピーバースデーの大合唱。私も即興マジックで盛り上げます。そして、また自然に個々の授業に戻っていきます。教科学習は個別の授業が主でしたがホームルームは学部も学年も超えてみんなでカードゲームで盛り上がりました。勝負事には教員も真剣。でも、勝っても楽しい、負けても楽しい。なんでもかんでもみんなでも笑いに変わっちゃいました。

いるかでの子どもの姿に「あんな笑顔、病室で見たことない。なんか悔しくなっちゃう」という看護師さんの言葉や「つらい治療中でも授業時間になるとパツと着替え、喜々として教室に向かう。友だちと会い授業を楽しみにすることで闘病の苦しみを忘れることができるのでしょう」という医師の言葉も、いるかが子どもたちにとってどんなに大切な場かを物語っています。

「いるかはみんなが笑顔になれる場」。それが子どもたちのねがいです。

病気になる失われる日常と安心感

ただ、子どもたちは最初から笑うことができていたわけではなくありません。思春期に突然見舞われた小児がん「なぜ自



佐藤比呂二

さとう ひろじ／東京都生まれ。特別支援学校教員。編著書に『ホントのねがいをつかむ—自閉症児を育む実践』（全障研出版部）など。